

外国人の人権尊重に関する実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

秋田県能代市

○学校名

秋田県立能代松陽高等学校

○学校のURL

<http://www.noshiroshoyo-h.akita-pref.ed.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各6学級、【特別支援学級】0学級、【合計】18学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】650名（平成28年11月30日現在）
（内訳：1年生209名、2年生220名、3年生221名）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

特記事項なし

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育理念】

グローバルな視野で未来を切り拓く力を持つ人間の育成

【学校の教育方針】

「自主的な学習態度を身に付け、学力の向上を図る」「基本的な生活習慣を確立し、豊かな心や思いやりの気持ちを育む」「キャリア教育の推進により、生徒個々の能力を最大限に伸ばし、進路実現を図る」「郷土や日本の文化を尊ぶ気持ちを育み、国際教育を積極的に推進する」

【人権教育に関する目標】

「生徒が誇りと連帯感を持ちながら諸種の活動に主体的に取り組み、達成感を得させるように指導する」「生徒一人一人が他を思いやり、いじめのない学校生活を送る環境づくりを推進する」

○人権教育に係る取組一口メモ

外国人に対して偏見を持ったり差別をしたりしないように、学校行事を通して異文化と触れ合う機会を増やし、異文化を受け入れる素地を養う。

○人権教育にかかる取組の全体概要

- ・ 「国際理解講座」を通して異文化に関する知識を身に付ける機会を増やす。
- ・ 「短期留学生の受け入れ」「姉妹校生徒との交流」「国際交流事業への参加」を通して積極的に異文化に触れる機会を増やす。
- ・ 国際教育部通信や学校HPを通して、実践内容を全体で共有する。

3. 実践事例の内容

(取組のねらい、目的)

外国人、外国人に対して日本語を教えている先生、外国文化について研究している大学教員、本校勤務の外国人講師等から話を聞き、異文化についての知識を深めて、異文化を受け入れる素地を養う。

(取組を始めたきっかけ)

統合により誕生した普通科・国際コミュニケーション科・情報ビジネス科をもつ高等学校として開校し、学校目標の一つでもある国際教育の一環として、異文化に触れる機会をできる限り増やすのが良いと判断して始めた。

(取組の内容)

異文化について知る機会として、本校独自の行事である「国際理解講座」を年に数回行っている。第1回は、1年生全員に対して地元で日本語教室を開いている先生から、国際交流の大切さや日本にいる外国人の苦勞などの話をしてもらっている。生徒たちは、先生からの質問について考えながら、国際交流の難しさや楽しさについて学んでいる。中には日本語教室にボランティアで参加する生徒もいる。本校にはこの日本語教室で日本語を学んだ生徒も複数在籍している。第2回の講座では、1年生全員を対象に、中国・韓国・ロシアについて文化紹介を行っている。本校では第二外国語として中国語・韓国語・ロシア語を履修でき、その授業を受けもつ中国人講師とロシア人講師、秋田県の国際交流員である韓国人の3名に自国の紹介をしてもらっている。秋田県と関わりの深い3つの国について知識を深める良い機会となっている。第3回は2年生全員を対象に、「環太平洋講座」と題して中国・韓国・ロシア・アメリカと日本との間に生じる様々な問題について、大学教員から解説をしていただいている。日本人の目線からだけではなく、相手国からの目線や客観的な視点から問題を解説してもらうことで、異文化に対する攻撃的・排他的な考えを和らげることができているのではないかと考えられる。



「国際理解講座」以外の取組としては、短期留学生の受け入れ、アメリカにある姉妹校との交流、国際交流事業への参加の奨励などが挙げられる。姉妹校には、本校から毎年冬に語学研修として約2週間訪問している。また、隔年で6月に本校への受け入れを実施している。本校生徒の家庭でホストファミリーを引き受け、異文化交流をしている。国際交流事業としては、文部科学省主催の日韓高校生交流事業への参加、秋田県が行っているロシア・ウラジオストクの高校生との交流、韓国の寧越郡の高校生との交流などを行い、実際に異文化を体験する機会を増や

している。交流に参加した後は、参加していない生徒に対してプレゼンテーションなどを行い、異文化について学んだことを共有するようにしている。

今年度からは、韓国寧越郡の高校生とSNSを使って情報のやり取りを行っている。現状では微妙な関係の日韓であるが、生徒たちはわだかまりなく他国の友人としての関係を築いている。

これらの実践は、毎月発行している国際教育部通信「コクリカ坂」や学校HPで取り上げることで情報共有している。

(取組の主体や実施体制)

校務分掌の一つである「国際教育部」が計画して実施している。実施に当たっては、当該学年部と協力している。第3回国際理解講座では、生徒がプレゼンテーションを作成して発表する場合もある。その場合は、国際教育部の担当部員が指導を行っている。

(取組の頻度)

国際理解講座は年3回以上行っている。姉妹校へは毎年訪問している。姉妹校からの本校への受け入れは隔年で実施している。国際交流事業への参加、留学生の受け入れは毎年行っている。

(取組を実現するに当たって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫)

秋田にいながら異文化に触れるためには、外国人や外国の文化に精通している講師を呼ぶ必要があり、旅費や謝礼など多くの費用がかかるが、県庁や大学の出前講座や県からの補助を活用することで出費を抑えている。姉妹校との交流はお互いにホストファミリーを活用して、ほぼ旅費だけで行き来ができるようにしている。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(取組を実施する際に生じた課題)

今年度、姉妹校からの受入れをした際に、黒人生徒に対して肌の色の黒さなど、明らかに差別的な発言をする生徒が出てしまった。その気がなくても差別的と捉えられる言動に気が付かない、あるいは鈍感な生徒が多かったことが原因だと考えられた。

(課題に対する解決方法)

翌日の朝に緊急の全校集会を開き、実際に起こったこととそのことの重大さについて、校長から全校生徒に話をした。本人にその気がなくても、決して言うてはいけないことがあること、差別する気がなくても差別と捉えられる場合があることなどについて生徒に考えてもらい、実際に差別的な発言をした生徒には謝罪の気持ちを伝えるように指導をした。その後、問題となるような言動は見られなかった。

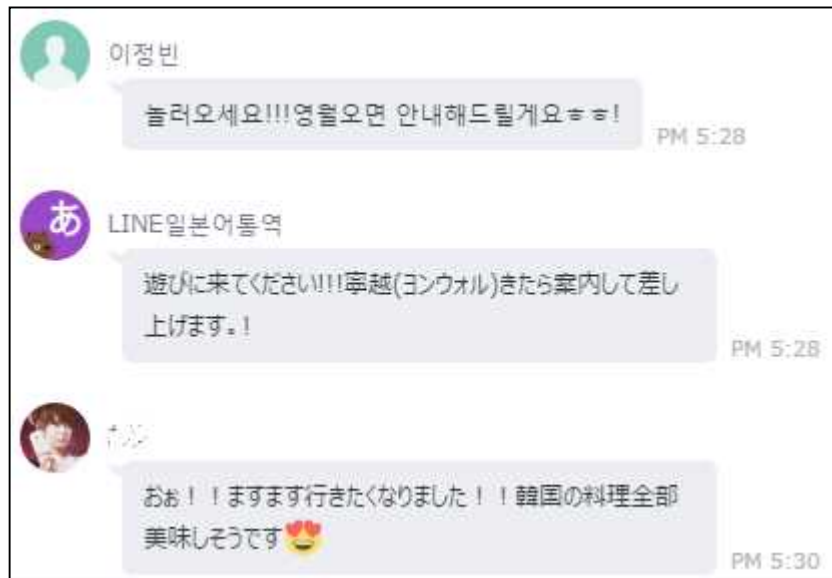
5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組が効果を上げた実際の事例)

行事等を通して、生徒の中に異文化に対する意識の高まりが見られる。「国際理解・国際協力のための英語弁論大会」には毎年数名が参加しているが、これまで

に「海外修学旅行での異文化体験」、「他国の貧困について」、「日本にも差別があることを認識し、お互いの違いを受け入れることの大切さ」などの内容でスピーチを行ってきた。

韓国の高校生とのSNS交流では、身近な話題を中心に両国の文化の違いについてやり取りを行い、少しずつではあるが参加人数が増えてきている。交流の様子を友人に聞いて、韓国について興味を持つ生徒も増えているようである。



(取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項)

行事等を通して、異文化について自分の考えを持つ生徒は多いように思われる。そのため、その意見を発表する機会を与えるためにも積極的にスピーチコンテストなどへの参加を促している。今年度は英語とロシア語のスピーチコンテストに参加し、異文化体験について自分の意見を発表した生徒がいた。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びそう評価する理由)

本校には親が外国人であったり、本人が外国籍を有したりする生徒もいるが、これまで差別的な言動が問題になったことはない。また、進路希望として、「韓国や中国と日本との懸け橋となるような職業に就きたい」「海外で日本語を教えたい」「ホテルや空港など国際的な職場で働きたい」などの考えをもつ生徒が増えているように思われる。これは、入学時から異文化について考えたり、直接触れたりする機会が多いので、異文化を「差別する対象」ではなく「常に身近にあるもの」「自分と関係があるもの」と捉えているからではないかと考えられる。

(保護者や地域住民からの反応)

保護者アンケートの結果によると、「本校は国際教育に力を入れている」という項目について8割以上の保護者が「当てはまる」と解答しており、本校の国際教育はおおむねうまくいっていると考えられる。

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

行事として異文化に触れる機会が増えたため、生徒は異文化に対して違和感を持っていないが、保護者は全く違うと感じられることがある。修学旅行のように学校行事を企画する上で保護者の意見を取り入れる必要性はあり、今後保護者の意識をどれだけ変えられるかは一つの課題だと思われる。